

アユ資源の状況について

1 アユ資源の状況

(1) 天然河川の産卵状況(主要 11 河川)

- ・ 令和3年8月下旬から2週間に1回のペースで6回調査。
- ・ 総産卵数は156.2億粒と平年の約2倍 (平年比221.9%)。
- ・ 8月中旬の降雨により産卵の開始が早まり、産卵ピークは平年と比較してやや早い時期(9月中旬)となった。また、親魚資源量が多かったことに加え、ピーク時に河川環境が良好であったことから、産卵数が多くなったと推測。

表1 調査次別合計産卵数と平年値との比較 (単位：億粒)

調査次	1次	2次	3次	4次	5次	6次	総産卵数
	8/27-9/1	9/13-16	9/27-30	10/11-14	10/25-27	11/8-11	
R3	2.7	<u>136.2</u>	12.4	1.8	2.5	0.6	156.2
平年値*	0.1	19.0	<u>27.1</u>	9.3	0.5	0.0	70.4

※平年値：過去10年のうち、最大値と最小値、肥満度低下により産卵が激減しH24年および過小評価と判断されたH30年の値を除く平均値。

(2) 湖中アユの資源状況

①湖中仔アユ(ヒウオ)生息状況調査

□ 調査概要

- ・ 河川でふ化し、琵琶湖へ流下した仔アユの生息状況を把握する調査。



図1 採捕されたアユ仔魚と調査風景(デモ)

1cm~4cmほどのアユが採捕される。



図2 調査水域

□採捕尾数

- ・ 第1次調査(10月4、5日): 332尾/曳網 平年(142尾/曳網)の234%
- ・ 第2次調査(11月2、4日): 431尾/曳網 平年(67尾/曳網)の643%
- ・ 第3次調査(12月2、3日): 179尾/曳網 平年(18尾/曳網)の994%
- ・ 調査を通じて、採捕尾数は平年を大きく上回った。

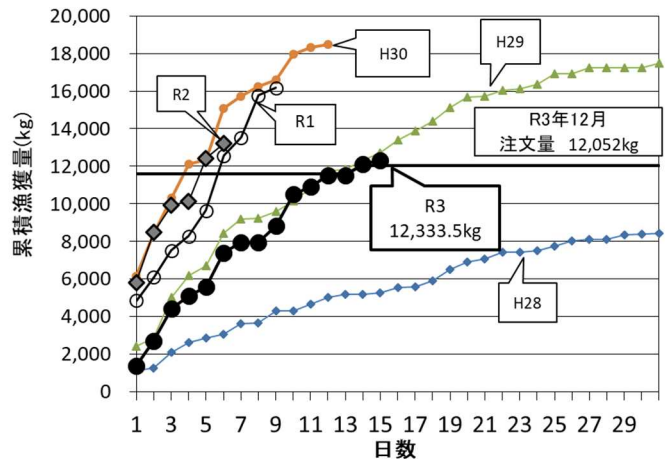
②周回コースによる魚群調査

- 1月期を1月15日、16日に実施。
- 魚群探知機による魚群数は177群で、平年値194群の91%となり、ほぼ平年並み。
- 魚群数として計数されない小群未満の魚群が多く観察された。



2 早期アユの漁獲状況

- 12月1日から活アユ漁獲開始 (12月注文量 12,052kg)
- エリの操業合計統数は45統 (16漁協)。(R2:41統 R1:46統)
- 初日の漁獲量は1,374kgで過去10年の平均値5,175kgの26.5%。
- 初日の漁獲量が平年値よりも大幅に少ないのは、荒天だったことにより出漁できたのは16漁協のうち5漁協のみで、出漁した漁協もすべての網を上げられないなど、部分的な操業にとどまったため。
- 15日目 (12月15日) に累積漁獲量12,333.5kgとなり一旦終了。
- 鮮魚の漁獲は、12月25日まで継続。
- エリ漁は1月12日に再開し、活アユは1月25日でほぼ充足 (2,756kg)。



3 まとめ

- 今期は産卵量が多く、河川水量も豊富であったことから、ふ化や流下が良好であったと推測され、密度効果で体長が小さく推移していると考えられる。解禁当初のアユ耳石日周輪による成長解析でも10月以降の成長が遅くなっている。
- 産卵調査、ヒウオ生息状況調査ともに平年値を大きく上回っており、初期資源尾数は平年よりも多いと推測された。1月期の魚群調査で平年並みとなったが、魚群数として計数されない小群未満の群れが多く、1月期も資源は多いと推測。
- 今期の12月解禁当初のアユの平均体長は35.6mmと平年の39.0mmより小型であった。体長約4cm未満のアユは大きな群れをつくらなためまとめて漁獲されにくく、また、入網しても網目から抜けるものも多く、さらに、荒天による操業見合わせと相まって、解禁当初は低調な漁獲となったと考えられる。
- 今後、アユが成長し、魚体サイズが大きくなれば漁獲が進むと考えられるが、今期は降雪が多いため、水温低下による減耗や成長低下が懸念されることから、今後の資源動向等を注意深く調査する。